

新体詩 浦づと : 文苑

著者	天花
雑誌名	龍南會雜誌
巻	8 2
ページ	7 8 - 8 0
発行年	1900-10-30
URL	http://hdl.handle.net/2298/5036

か逢ひ見ん、何れの時にか言問はん。げに空蟬の人の世は、定めなき習なりといへど、
花よりもなほ仇なるものなれや。軒に音づるゝさみだれに、山時鳥のあやなくも、
あやめ草のながきぬを泣くのみかは。行末年毎の花の朝も月の夜も、共に見し世を
なぞか忍ばさんやは。

思ふとちつごはん度にあはれく

あらましかばと繰言やせん

明治三十二年五月二日

新体詩

浦づこ

富津の朝

天 花

薄く黒める浦なみの
色むらさきに變るとき

小松が末の露れちて
巖の苔にかをりあり

緩くよせくる朝潮の

さくやく聲に静かなる
夢よりさめし五位驚の
はぐたきするよいその上

夕べの幕のれちそめて
すゝ風通ふ辨天の

杜に聞ゆる鳥のこへ
なれもうたふか祈の歌

みづにうつれる松影を
みだして沖ゆいさり男の
釣を収めて漕ぎかへる
富津の浦の静けさよ

まだ年若き海士の子が
集ふ濱邊の手すさびに
眞妙をとりて投げやれば
環をつくる浪の花

をかしたはやす聲きわて
静かによする夕潮に
かをるや底の藻の花の
蔭に魚こそひそむなれ

富津の夕

幾重かさなる雲の峰
くだけて細き一ひらに
燃ゆるばかりの紅を
残して沈む夕日影

老松しげる辨天の
ほこらに勾ふ紫は
牡蠣の花さく岩が根の
白きもつゝむ暮の色

きよき潮を眺めつゝ
底にひうめる星影を
かぞふるわれを吹く風の
いと涼しくもれもほゆる

潮路半ばに月いでぬ

さらば浦わに舟うけて
波さる櫂につき影を
碎きて歌をさぐらまし

湖上曲

黄ばめる蘆間吹く風の、
そよぎに秋も知らるかな。
夕さびしき水の上に、
舟を浮ぶる繪津の湖。

堤づたひに家路行く、
馬子の鼻唄力なく、
眠げに鈴の鳴りゆくは、
暮れゆく今日を吊ふか。

森、丘、小川、田の面を、

波のまに／＼漂ひて
舟べりたゞきわが歌ふ
聲は遙かに消へてゆく
三十五里の千々石灘

梨雨

越わつゝせまる暮の色、
休息、眠をのせながら、
今湖の上をさまよへり。

湖上を高くよこぎりて、
時に歸る夕がらす、
一聲二聲また三聲、
さびしや今日も暮れんとす。

夕暮つぐる鐘の音に、
さとき明星眼醒めけむ、